

---

# 親友と見た未来

真弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

親友と見た未来

### 【Nコード】

N3016R

### 【作者名】

真弥

### 【あらすじ】

あの日、俺は親友と出会った。

七年前の約束を果たすため。

社会人になった俺の元にやってきたのは、七年前の姿をした親友だった。

俺が社会人になって、二度目の冬を迎えた。一年目は仕事を覚える事が必死で、あいつの事を考える暇なんて無かったが、やっと仕事にも慣れ、近頃はあいつとの約束の日が待ち遠しくなっていた。そして今日、やっとその約束の日を迎えていた。

「寺川、もう帰っていいぞ」

部長がそう俺に言った。前々から、今日この日の事を、部長には言っていたし、部長は俺を含め、部下の言う事にはしっかりと耳を傾け、理解のある人であったため、今日は早めに仕事を上げさせてもらう事になっていた。今は昼の十二時。普段ならこんな時間に仕事を切り上げることなどない。

「あれ？ 悠哉さん、今日はお早いですね」

後輩が帰り仕度をしている俺にそう言った。

「悪いな。今日は親友に会いに行くんだ」

俺がそう言うのと、後輩は思い出したかの様に目と口を開き、あゝ。と声を出した。

「前に言っていましたね。今日だったんだ」

「そうなんだ。お先に失礼するよ」

後輩は笑顔で俺にお辞儀をすると、温かく見送ってくれた。

『七年後の12月12日、いつも俺達が行くあの公園で、俺を待っていてくれないか？』

あいつはそう俺に言った。七年もの前の約束だが、俺には忘れる事が出来なかった。それほど、あいつとのその約束は俺にとって重要だった。その頃は、あいつの言う事を信じていなかったのは事実だった。でも俺は数年前から、この日が来るのをずっと待ち望んでいた。あいつは絶対に来る。俺はそう信じて止まなかった。

会社を出て一時間ほど電車に乗り、実家の近くの駅までやって来

た。暫く見ないうちに、駅前も姿を変え、何もなかった広場も、今はマンションが建っている。昔よく訪れた駄菓子やも、コンビニエンスストアに変わり、ボロボロだった交番も、新しくなっていた。今から五年前、県外の大学に進学した俺は、今住んでいる隣の県で一人暮らしを初め、大学卒業後、同じ県の会社に就職した。前回の駅に降り立ったのは、就職が決まり、親に報告に来た時以来だ。

俺はケータイで時間を見た。今は午後二時、待ち合わせの時間まであと三十分程だ。俺は、あいつの言った場所に向かう事にした。

駅から徒歩十五分程で、待ち合わせ場所である公園に着いた。公園といってもこれといった遊具があるわけではない。ただ砂場とブランコがあるだけの、小さな小さな公園だった。でも、俺とあいつにとっては忘れる事のない思い出が何度も出来た場所であった。昔から変わる事のない、石で出来たベンチに腰を下ろすと、俺は辺りを見回した。見ているだけで、あの頃を思い出す。懐かしさに酔いしれていると、学生服を着た少年が俺に近付いてきた。俺は、彼の顔を確認すると、心躍るように立ち上がり、彼を迎えた。そう、その少年こそ、俺の親友・中村尚人だった。

「……悠哉なの？」

尚人は不思議そうに俺に訊いた。俺は深く何度も頷いた。

「じゃあここは……本当に」

「そうだよ。お前にこんな風に言うのは変かも知れないけど、久しぶり」

俺は喜びと感動で胸がいっぱいだった。尚人は恥ずかしそうに頭をかいた。

「そっか……悠哉はこんな大人なんだね」

俺はどう答えて良いかわからず、返事に困った。

「ここ覚えてる？」

俺の態度に気が付き、話題を変えるためか、尚人は俺に質問した。

「ああ、覚えている。毎日のように俺はお前と、ここで語ったんだよな」

学校が終わり、家に向かう前、俺と尚人は、この公園で多くを語った。毎日、毎日、下らない世間話や、将来の夢、恋愛話など、空が暗くなるまで語り合った。全ては覚えていないものの、ここで語った多くの話を、今でも俺は覚えている。

「懐かしいな」

俺はそう呟いた。しかし尚人はただ黙っていた。それはそうか。

俺は自分の中で納得し、尚人の言葉を待った。

「時間が無いから行こう」

尚人はそう言うと、俺に微笑んだ。

何をするわけでもなく、俺と尚人は、道を歩いた。そして、いろいろな事を、昔のように語った。俺の職場の事、恋愛の事、二人の両親や友人の事、過去の事。話を聞いた尚人は、驚いたり、笑ったり、黙ったり、俺の言葉に感情が左右されるのか、凄く辛そうではあったが、俺の話を拒むことなく、何でも理解しようとしていた。そうしている内に、俺と尚人は、二人の母校である小学校に辿り着いた。

「何年ぶりだろう」

俺は小学校を見るなり、そう呟いた。今日、学校は休みのようで、どこを見ても人の姿が確認できない。尚人は、指で何かを数えていた。そして、その作業を終えたのか、指を見ながら俺に笑いかけた。「俺が卒業したのが五年前だから、悠哉なんてもう十年前位になるんじゃない？」

「もうそんなに経つのか……」

俺は素直に驚いていた。尚人と話をしていると、過去の記憶が昨日の事のように思えるため、そんなに大昔の事では無いように錯覚してしまう。俺と尚人は笑いながら、小学校の周りを回り始めた。

「あのさ、変な話、どういう感覚なんだ？」

俺は今まで聞けずにいた質問を、尚人に訊いた。

「どんな感覚って？」

何て説明したらいいのか、また迷った。今、二人が出会っているこの事実でさえ、説明するには時間がかかる。

「何て言えばいいのかな。俺は今、過去を見ている感じだ。でも尚人は未来を見ている感じ。こんな下手な説明しか出来ないけど、未来を見るってどんな感じなんだ？」

「うーん。どう説明すればいいかわからないんだけどね。とにかく夢を見ている感じなんだ」

尚人はそう表現した。俺はそれ以上、深くは聞かなかった。

「あ、あれ見てよ」

尚人は懐かしそうに、校庭の端に設置された、うんていを指差した。俺はそれを見るなり、様々な記憶を思い出していた。

「懐かしいな……」

俺が呟くと、尚人も嬉しそうに頷いた。

「小学校の時、悠哉と一緒に良く遊んだよな。確か『うんてい組』とか勝手に名乗って」

「そうそう！ 最初は全然出来なかったけど徐々に出来るようになっていったんだった」

本当に懐かしく思う。うんていだけではなく、他の遊具を見ても、尚人との思い出が、大量に溢れ出してくる。

「あの時は、何も考えず無邪気に遊んでいったっけ」

尚人がそう言った。

「これから、多くの壁にぶち当たるなんて知らなかったもんな。受験勉強やら試験やら……」

俺がそこまで言うのと、尚人が俺を睨んだ。俺はその意図を察し、言葉を止めた。

「……そうだよな。お前まだ高校生だ……。すまん」

俺が真剣に謝る姿を見て面白かったのか、尚人は涙を流すほど笑った。

「くっくく……ごめんごめん！ 謝らなくていいから。……ひよっとしたらあの時代が一番楽しかったのかもな」

そう言って、尚人はまた改めて、校内を見回した。

「おい悠哉！ 勝負しようよ！ グラウンド一周！」

急に尚人主催の強制イベントが発生した。俺の回答も聞かず、俺の腕を引っ張り、グラウンドの中へ連れて行く。

「待てよ！ やるなんて一言も……」

「やる前から怖気づいているの？ そっか、悠哉はもうオジサンだもんな」

その尚人の言葉にむきになった俺は、尚人の手を振り払うと、上着を一枚脱ぎ、地面に投げ捨てた。

「お前覚悟しろよ……俺は営業で足腰鍛えているんだ！」

ネクタイを取り終わった俺は、尚人の横に立つと、尚人の目を睨み付けた。

「オジサンと言った事を後悔させてやる」

俺の挑発を完全に無視をした尚人の掛け声とともに、二人だけの運動会がスタートした。

「何を飲む？ コーラでいい？」

尚人の頷きを確認した俺は、自動販売機のボタンを押した。ゴトンという音と共に、コーラが出てきた。それを尚人に渡すと、俺は新たに金を入れて、コーヒーを買った。

「はぁ……疲れた」

そう言いながら、尚人はコーラの栓を開けた。勢い良く、缶の中から飛沫が上がり、それを零すまいと、口で穴を塞いでいた。

俺と尚人は、母校を出るなり、小学校の近くにある自動販売機で喉を潤すことにした。自分の飲み物を調達した俺は、地面に座る尚人の横に腰を掛けた。

「しかし良い戦いだっただな」

そう言いながら俺は、缶コーヒーを口に運ぶ。運動をした後に飲むコーヒーは格別だった。

「あれ？ 悠哉ってコーヒー飲めた？」

不思議そうな顔で尚人が質問した。そう言えば昔、俺はコーヒーが大嫌いだった。今では、一日五〜六杯程は飲んでいる。

「大人になるとな、味覚も変わるんだよ」

そう言っ、俺は大人気なく誇らしげに見せてみた。まあ誇ることは無いが。もちろん尚人は大したリアクションもせず、俺をすごいひいた目で見ていた。そんな些細な事でも、尚人との今が大切に思えた。

「それはそうと、次はどこへ行く？」

俺が話題を変えるかの如く言った。尚人は少しも考える素振りも見せずに言った。

「塾へ行ってみよう」

俺と尚人は、中学時代、同じ塾に通っていた。とは言っても、総合塾ではなく、英語、数学のみの塾であった。しかし、俺達二人が高校に入学した頃、その塾は無くなってしまった。しかし、二人の間ではその後も、塾のあったビルは数年間重宝された。別々の高校に行った二人が、学校帰りなどに会い、話をする時など、そのビルの屋上へ上り、町並みや夜空を見ながらいろんなことを語り合っていた。そこも二人にとって、掛け替えの無い思い出の場所である。

「わかった、行こう」

俺と尚人は、地面から立ち上がるなり、塾へ向かった。

塾へは、小学校からは、歩いてでも30分はかからなかった。その間もちろん、いろいろな話をして過ごした。普段仕事以外でこんなに歩く事はないが、今この時は、歩く事が苦にならない。話が尽きる事が無いまま、塾があったビルに辿り着いた。

「懐かしい……」

俺は無意識のうちに呟いていた。尚人は俺を見て笑った。

「俺は三日前位に悠哉と来たんだけどな」

そうなのか……記憶には残っていないがそんな気がする。



「上がるのか。また屋上で話をしよう」

尚人は頷くと、ビルの際にある階段で屋上まで登って行った。ビルは四階建てで、そこまで高くは無い。しかし、周りに高い建物が無いため、屋上からは町が見渡せる。俺と尚人は、屋上に上がるなり、柵にもたれかかり、変わりつつある町並みを見回した。

「あんな所にコンビニがある！」

驚いたように尚人が言う。

「本当だ……昔は空き地だったのにな」

「あそこ！ クリーニング屋じゃなかった？」

「あれはな……えっと、あと半年ぐらいで無くなるよ……こんな事言っていないかわからないけど……」

本当に、この町は、数年間で姿を変えてきた。俺でもそう思うのだから、尚人には相当凄いことなんだろう。

暫く、町を観察した俺達は、屋上で寝転んで空を見上げた。少しずつではあるが、太陽が沈み始めている。

大体の思い出話に区切りが付いたので、俺は、ずっと聞けないでいた質問を聞く事にした。七年間、ずっとずっと待ち続けた質問を……。

「尚人……聞いていいかい？ あのさ……その、あの時……つまり、ここへ来るとき、お前が見た夢ってどんな奴だったんだ？」

尚人はあの時『夢を見た』と、俺に言ってきた。それから約束をした。しかし、その時に見たと言う夢を聞くことが出来なかった。今の今までずっと。何で聞けなかったのか分からない。でも今思うと、怖かったのかもしれない。聞くことで、何だか尚人が遠くに行ってしまうような……表現できない切ない気持ちだが、当時の俺にはあった。でも、もう今しか聞けない。そう思った俺は、覚悟を決め、尚人の回答を待っていた。

「何から説明したらいいかわからないんだ」

俺は尚人を見た。尚人の横顔は、戸惑っていた。

「ゆっくりでいい。教えて欲しい」

尚人は、ゆっくり頷き、少しずつ話し始めた。

「気が付くと、俺は、知らない部屋にいたんだ。しかも、目の前に、ベッドで寝ている俺。俺はすぐに気が付いたんだ。ここは病院で、目の前に寝ている俺は、自分の本体なんだって」

幽体離脱とでも言うのだろうか？ そう思ったが何も言わず、尚人の話に集中した。

「それで思い出したんだ。学校帰りに事故った事を……それで今ここで入院しているんだと言う事も何となく把握出来たんだ。その時は、自分が死んだんだと思ったよ」

今でも思い出すことが出来る。尚人は昏睡状態が続いて、命の危険もあると言われていた。尚人のお母さんが、泣きながら俺にそれを教えてくれたんだった。きつと、尚人はその時のことを教えてくれているんだろう。

「それでさ、誰かが俺を呼ぶんだ。辺りを見渡すと、何だか大きな光が近づいて来るんだよ。俺はその光に飲み込まれるんだ。で、次の瞬間、真っ白な部屋の中に、男の人が現れるんだ。でも光のせいなのかわからないけど、顔が見えないんだ。なんて言うか、顔が光っているっていうのかな。俺はその人が神様なんだと思えるくらい、神々しく見えたんだ」

話を聞きながら、俺は一生懸命、尚人の話の状況をイメージしていた。尚人の話は続いた。

「それで、その男の人が言うんだ」

そこまで言うのと、尚人が上半身を起こした。つられて俺も、同じ姿勢になった。

「『今から君に未来を見てもらおう』って」

そして、今日、尚人の言う未来で尚人と出会った。それは現実不起こっている話なんだ。

「それで？」

「その後、いろいろ条件を聞いたんだ。日が暮れるまでしかいられないとか、未来では悠哉としか会えないとか。理由は良くわからない

いけど、それが未来を見る条件なんだって。それで、それが終われば、元の身体に戻すとも言ってくれた」

俺は何故その男が、俺としか会えない事を条件にしたのかわからない。でも、結果的に尚人と合えたことは、本当に嬉しく思えた。

「まあ、こんな感じかな」

そう言って、尚人は立ち上がり、沈み行く太陽を見つめた。

「もうすぐお別れだな……」

俺は涙をぐっと堪えて、明るく言った。ここで俺は涙を流してはいけない。笑顔で、尚人を見送るんだ。

「あのさ、悠哉。最後にお願いを聞いて欲しいんだ」

尚人は、声色を普段より低くして俺にそう言った。

「お願い？」

尚人は振り向き、俺の目を見つめた。その眼差しは真剣そのものだった。

「未来の……今の俺に合わせて欲しい」

そ……それは無理だ……だって……。俺は戸惑いを隠せなかった。

「わかってるから……全部わかってるから」

そう言って、尚人は笑った。

あと三十分ほどで、日が暮れるだろう。そうになったら、尚人とお別れだ。俺は、尚人の最後の願いを叶えるため、尚人が眠る寺に足を運んでいた。

尚人は、自分が埋葬されたお墓の前で合掌していた。そんな尚人の背中を、俺はただじっと見つめていた。

「今日は一日ありがとう」

尚人は立ち上がり、俺が持っていた花を、受け取ると、自分のお墓にそれを置いた。

「全部聞いたんだ。その男の人に。自分が二十歳のときに病気にかかるって。病気も治すことが出来ない難病で、それが原因で死ぬって事も」

尚人の目の前に現れた男が、何故そこまで言うのかが不思議だった。俺は涙を止める事が出来なくなっていた。尚人の葬式でみた最後の尚人の顔を思い出してしまっていた。

「でもおかしかったんだ。死に対する恐怖が無いんだ。その話を聞いたときも、今も。夢だと思っていたわけじゃないし、なんだか素直に受け入れられたんだ。それに、その人は言った。未来を生きられないから、今未来で、悠哉と会わせてあげるって。正直に嬉しいと思った。もし死んだら、悠哉の未来は見られないし、未来の悠哉に会えるなら、死んでもいいと思っただくらいなんだ」

涙が溢れ出ていた。服の袖で拭っても拭っても、終わる事が無かった。

「それにね、最後の条件として、戻った後は、必ず悠哉に約束をするように言われたんだ。七年後の12月12日、いつも俺たちが行くあの公園で、俺を待つように約束する事を。その理由はわかったよ。未来の悠哉と会うためだったんだね」

尚人は嬉しそうに笑い、そして泣いた。

「泣かないって決めていたんだけど……泣きたいのは悠哉だよ。俺は帰れば悠哉と話できるんだけど、悠哉にとっては最後の別れだもんね。ごめんね。これから先、愚痴や相談聞いてあげられなくて」  
そう言って、尚人は顔を腕で覆った。泣いている姿を見せたくないのだろう。

「俺は今日いっぱい聞いてもらった。今度は俺が聞く番だ。過去の俺にいっぱい話を聞いてもらってくれ」

そう言って、涙で顔をぐちゃぐちゃにしながらも俺は笑って見せた。

「そうだね。いっぱい聞いてもらうよ」

尚人の顔も酷かった。でも笑顔は耐えなかった。

「俺も頼みがあるんだ。向こうに戻っても、今日の事と尚人が死んだ事を俺に言わないで欲しいんだ。俺不器用だから、そんな話聞いたらどうしたらいいか混乱するだろうから」

俺の言葉に尚人は笑いながら何度も頷いた。気が付くと、尚人の身体がゆっくりと光を発し始めていた。尚人もそれに気が付いたのか、自分の手のひらを見つめている。空を見ると、もう暗くなっている。

「そろそろ行かなきゃ……今日は楽しかった。いろいろな所にも行けたし、いろいろ勝たれたし……競争で勝ったしね」

「あれは……手加減してやったんだよ！」

照れながら俺は言い訳をした。尚人は笑いながら、手を差し出した。俺は尚人の手を握り締めた。

「そういう事にしといてあげるよ。それじゃあ……ね」

俺は泣きながら、笑顔で親友を見送った。尚人の光が次第に強くなり、目の前が真っ白になった。

目を開けると、そこにはもう、尚人の姿は無かった。

「尚人？ ……尚人！！」

目の前のベッドで意識不明だった親友の尚人が目を覚ました。尚人の両親と俺は、喜んで尚人に声をかけた。

「……悠哉か……」

「そうだよ！ 俺だよ！ 悠哉だよ！」

俺は嬉しくて嬉しくて涙を隠せなかった。三日間も生死を彷徨い続けた尚人が、無事に戻ってきたんだ。

「悠哉……俺、未来のお前に会ってきた」

尚人が急にそんな事を言ったので、俺は正直驚いた。

「夢を見ていたんだな？」

俺がそう訊くと、尚人は首を横に振った。

「本当なんだ。神様に案内されて、七年後のお前に会いに行ったんだ。二人でいろいろな場所を回って、話をしてきたんだ」

尚人の言っている事は理解できなかったが、嘘をついている目には見えなかった。

「七年後の12月12日、いつも俺たちが行くあの公園で、俺を待  
つていてくれないか？」

尚人は真剣な顔で俺と約束をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3016r/>

---

親友と見た未来

2011年5月27日19時10分発行